『國民新報』1940年7月14日

[主張]　一兵卒の心構[[1]](#footnote-1)

　四、はアジアののをした。なんといふ大きなであらう。しかし、アジアのまでには、まだまだ遼だ。蔣のや、蔣の、ののためにはも、まだまだいくつかのなるものがなくてはならず、[を]一したに八紘一のにつてからが一一のとなることであらう。しかしなんとつても、三年の[[2]](#footnote-2)はなるものであることにりはないのだ。

　さて、のをみるにり、もつとも々のを搏つものは一の構である。そもそものは、にける一の構にあるものだ。一の構は決してのみの構をすものではない。はより、にるまで、そのにのはあつても、一の構にいては一つなのである。といふものはするに一の構にならないものとふ。

　しからば、一の構とはんであるか。それはぜられたるポストにずる構である。一あるをぜられたからには、ののあるまで、一もいてはならない。たじろいではならない。があつてはならない。それこそ一、そのポストをり、そのためにのをして、そしてしてにむといふなのである。このに、のがあらうがないではないか。こののいはち、いはけるに定まつてゐるのだ。

　ところが、このはにでばかり、になるものではない。にいては、ととをはず、の一一に、この一の構がになるのだ。にの、のにいてりである。

　われわれはのにいて、ドイツのが、そのたるとたるとをはず、にこの一の構にえてゐるかをすることがた。しかしてその一の構が、のににかしいをしたかをすることがた。ドイツのににたものをしたである。

つてわれわれをみるとき、してたるところがないだらうか。三わがはによくつてれた。にするり、一の構にいてはないことをたのであるが、われわれのには、まだまだりぬところがあるやうながする。ことににいて、さうではあるまいか。一まらぬにいて、日や交のだらしなさにいて、のにいて、のにいて、われわれは一のへのりなさをにずるのである。かくあることはのへ、のへであつて、にけるのポストをした一のへとははれない。なるでも、さうなくてはならぬのであるが、にのにいてはそれがであれ、であれ、はたまたであれ、すべてわれわれにけられるのはでなければならない。のは、一の構へでそれにへなければならない。一一のをにくことをさない。ちにぜられたポストにいて、ぜられたをさなければならない。しかしてそれは、してむのものなのである。

四のにいて、よ、一のへをめよう。

1. 「心構」の表記は本文の一部で「心構へ」とされ、単行本『同胞に寄す』ではこちらに統一されている。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 新聞では「三年の」と誤記されている。 [↑](#footnote-ref-2)